

交通案内

◆名鉄津島線

名鉄名古屋駅から約22分

◆東名阪自動車道

弥富I.Cから約15分

蟹江I.Cから約15分

◆名鉄尾西線

名鉄弥富駅から約10分

◆名神高速道路

岐阜羽島I.Cから約35分

◆名鉄バス

名鉄バスセンターから約50分

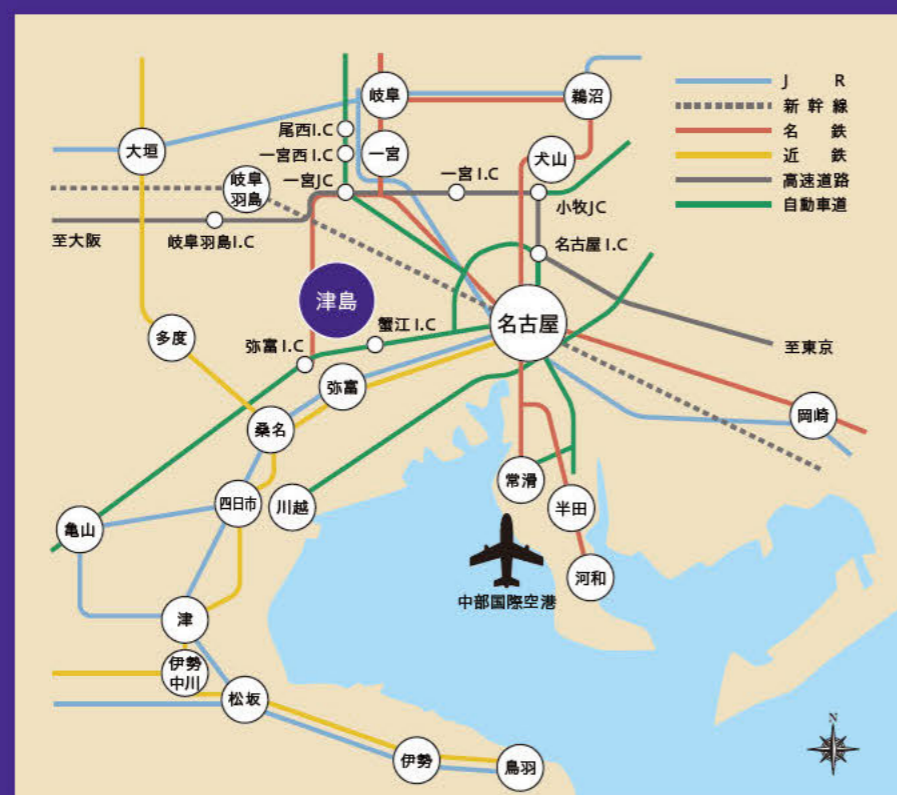
◆東海北陸自動車道

尾西I.Cから約35分

素顔の

津島

島



あなただけの物語がここにある

DISCOVER TSUSHIMA



津島の観光情報を
検索、投稿してください。

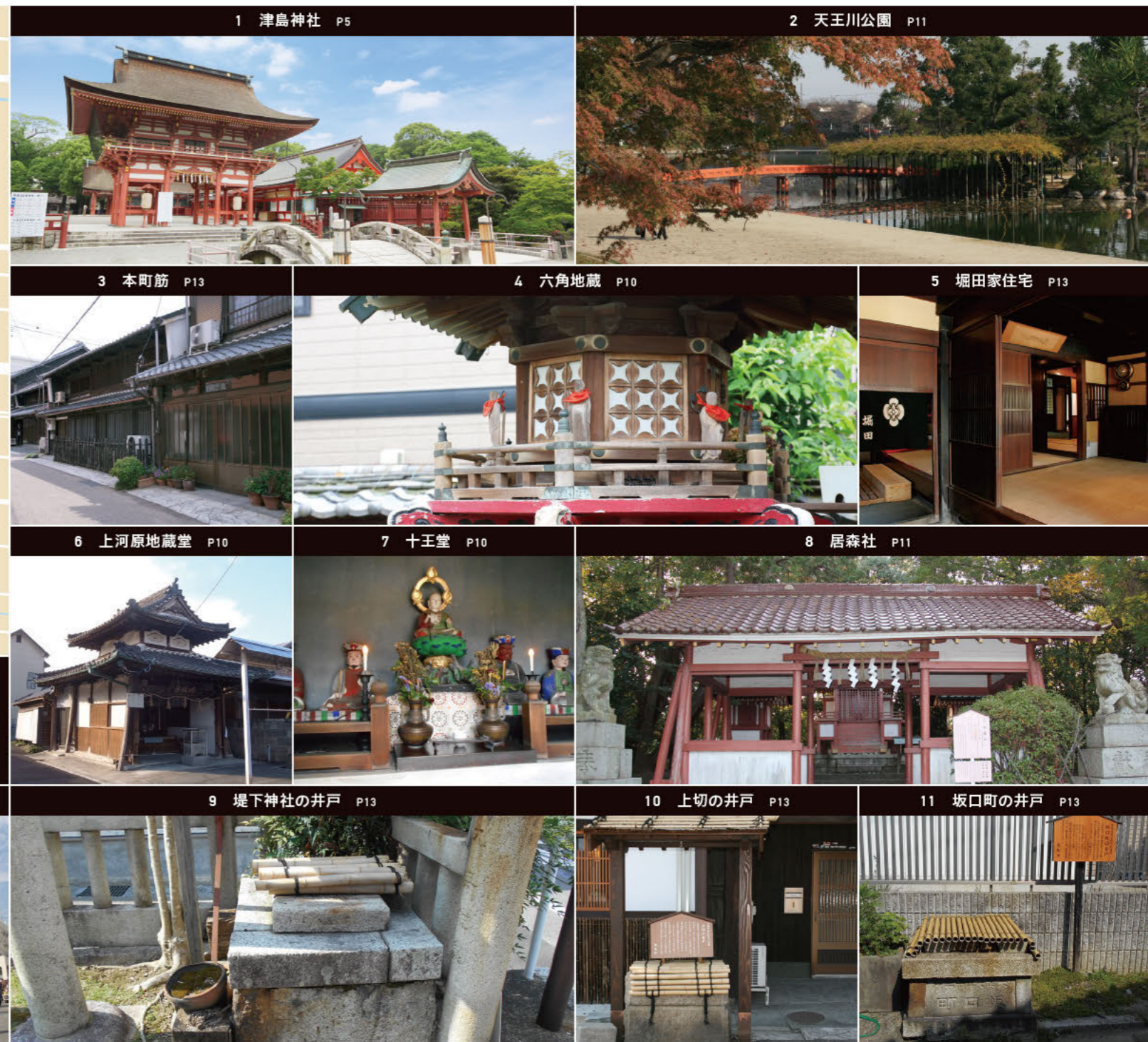
#津島にぎわい

#cooltsumi

何気ない日常が
楽しいまち

津島

中世から近世にかけて湊町として栄え、
織田信長をはじめ多くの戦国武将とゆかり深く歴史あるまち“津島”
西暦540年に創建され、全国3000社の天王信仰の総本社である津島神社。
日本三大川祭のひとつで、ユネスコ無形文化遺産に登録された尾張津島天王祭。
定番の観光名所だけでなく、一年を通じて、何気ない日常が楽しいまち“津島”の
あなただけの魅力を発見してみませんか。



四大祭り

四大祭りと呼ばれる四季折々の祭は、かつて津島神社の門前町、天王川の湊町として繁栄した津島の豊かさと活力を示しています。ぜひ実際に訪れて体感してみてください。



【開催日/場所】
旧暦2月1日/津島神社

【開催日/場所】
4月下旬から5月上旬/天王川公園

【開催日/場所】
(宵祭)7月第4土曜日・(朝祭)宵祭の翌日/天王川公園

【開催日/場所】
10月第1日曜日とその前日の土曜日/津島駅と津島神社周辺

初釜



津島に根付く「一服」文化

はつがま
初釜とは新年に茶道の稽古を始める日のことをいい、
茶道の新年会のようなものです。
津島市内ではあちこちで初釜が行われます。

日本の伝統、町家と抹茶文化

室町時代に始まった抹茶文化は、江戸時代に町人文化として根付き、津島では庄屋らが頻りに茶会を催していました。抹茶文化は、現在の津島にある町家にも残っています。客をもてなすための茶室があり、家によっては、複数の茶室を持っています。今も津島には日常生活の中で抹茶を楽しむ風習が残っており、茶室の公開や茶会が開催されています。また、市内の和菓子屋さんやお茶屋さんでも抹茶を味わうことができますので、誰でも気軽に抹茶文化に触れることができます。



茶室 (堀田家住宅)



お茶屋さんの抹茶を挽く石臼



抹茶と和菓子



茅の輪くぐり

津島神社の初詣のご利益

初釜のほかにも、初夢や初笑いなど、新年には「初」のつく言葉が多いですが、中でも欠かせない行事と言えば初詣です。疫病災難除け、授福の神である牛頭天王信仰の総本社、津島神社は、正月三が日だけでも約30万人の人々が訪れます。また、1月4日から7日に行われる和魂社例祭の茅の輪くぐりは、津島神社にたてられる茅の輪をくぐる新年の行事で、輪をくぐると1年間無病息災で過ごせると伝えられています。

鮎味噌



時代を超えて受け継いできた郷土料理

郷土料理には、地域の歴史や文化、生活がひとつのお皿にあらわれています。
津島はその昔、木曾川河口の湊町として栄えていました。
そのため、鮎、もろこ、うなぎ等を使った川魚料理は郷土の伝統料理となっています。

ファンが足しげく通う川魚グルメ

鮎味噌は鮎と大豆をザラメ・赤味噌で長時間煮た料理です。このあたりの地域はかつて水郷地帯であり、付近の川でとれる鮎は重要なタンパク源でした。川魚特有のくさみ

を消すため、味噌を使い、じっくりと煮込むので、鮎も大豆も驚くほど柔らかく出来上がります。この地方の惣菜屋では冬季にはごく普通に販売されています。

津島名物を味わう

津島には多くの郷土料理や特産物があります。



祭料理 もろこ寿司
甘辛く煮付けたもろこをつかった押し寿司。もろこは濃い味をつけることで川魚独特の匂いが消え、日持ちもするようになります。天王祭や秋まつりで親戚・知人らが集まった時につくられる料理です。



具だくさん 重箱うどん
江戸時代に津島の住民は天王祭やお花見の際に、うどんや蕎麦をお弁当として持っていきまし。そのお弁当をアレンジしたもので、漆塗りの重箱に入った手打ちうどんです。



津島発祥 越津ねぎ
江戸時代中期に津島の越津町周辺で栽培され始め、徳川幕府へも献上されていました。愛知の伝統野菜にも指定されています。



新しいブランド ゆめのか (いちご)
木曾川の肥沃な土地で育った津島のいちごは、粒が大きく、形もいい上に、味もまた抜群です。

開扉祭



春の訪れを告げる炎の祭

大迫力！津島の火祭

おみと
開扉祭は、津島神社で年間に行われる90以上の祭典の中で、天王祭に次ぐ重要なもので、毎年旧暦2月1日に行われます。直径1メートル、長さ10メートルの点火された2本の大松明を担いで、一気に楼門をくぐり抜ける勇壮な火祭として知られています。松明の燃え残りは、田の虫除け・雷除けや、箸として使うと歯痛除けに効き目があると言われ、参拝者は争って持ち帰ります。



西の八坂神社、東の津島神社

古くは牛頭天王社と呼ばれ、全国に3000以上点在する「津島神社」の総本社です。江戸時代には、江戸からの伊勢参りの折に参拝することがなわらわしとなっており、伊勢神宮だけでは片参りとされていました。現在も「津島さん」「天王さん」と呼ばれて親しまれ、年間約100万人の人々が「津島詣」に訪れます。



津島神社

織田信長は津島神社を産土神として深く信仰したと伝えられ、織田家の家紋と津島神社の御神紋は同一の木瓜紋が使われています。また豊臣家・徳川家も津島神社への信仰が深く、多大な寄進をされており、楼門と本殿は、いずれも国の重要文化財に指定されています。



豊臣秀吉が寄進した楼門



津島神社の御神紋

徳川家康の息子・松平忠吉の妻政子が寄進した本殿



豊臣秀吉の息子・秀頼が寄進した南門

真名箸料理



神に供える料理

まなばし
鯉に一切手を触れず包丁と真名箸のみで鯉を捌く日本古来の技。真名箸とは魚を料理する時に使う、柄のついた木または鉄製の長い箸です。

鯉の真名箸料理

はるあがたまつり
津島神社は、古来旧暦2月に五穀豊作を祈る春祭、旧暦11月に豊かに実った五穀の神恩に感謝する秋祭を行います。この祭には、日光川沿いの12の村々から神供の鯉が奉納されるならわしがありました。祭典後神前で真名

箸と包丁を使ってこの鯉を料理し、塩、大根おろしで味付けをして神様にお供えした後、参拝者でいただきます。神職自らが行うことは珍しく、「津島の鯉の真名箸料理」と昔から広く世に知られています。

神を持った四人の巫女による神楽舞

だいだいこうぐら
津島神社では、毎年4月1日から13日まで太々講神楽が行われます。「八雲舞」が舞われ、鯉の「真名箸料理」が振る舞われます。

おし
室町時代には、当時の津島神社の社家が御師として、全国に「天王信仰」の布教活動をしていました。御師は各地の世話人宅において祈祷やお札の頒布を行い、信徒が津島参りをするときは神楽を催し、参拝や宿泊の世話をしてもなしました。しかし、社家制度の廃止と共に御師の活動が衰退し、これを受けて津島神社太々講社が結成されました。太々講神楽の期間は全国各地の太々講社からの代参者で賑わいます。



八雲舞

藤浪の里



津島の春は尾張津島藤まつり

薄紫の可憐な花が滝のように垂れ下がり、風に揺らめく様子が美しい藤の花。かつて津島は「藤浪の里」といわれたほど、藤の名所として知られています。

美しい藤のカーテンは津島の春の象徴

藤浪の里の名残を今に伝えるのが、毎年4月下旬から5月上旬にかけて行われる「尾張津島藤まつり」です。天王川公園には長さ275m、面積5,034㎡の壮大なスケールの藤棚があり、陽光に照らされ鮮やかに輝く紫の群房から

甘い香りが立ち込めています。藤棚下を流れる疎水の水面に映える藤の花はとても美しく、また、期間中の夜にはライトアップも行われ、光り輝く幻想的な藤の花も格別です。



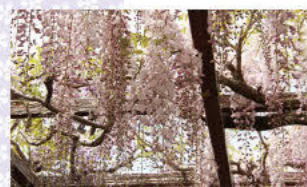
かびたんふじ
白・紫加比丹藤



ライトアップ

珍しい八重黒龍藤

東洋一ともいわれる藤棚には、九尺藤を中心に12品種114本もの藤が植えられています。中でも八重黒龍藤はとても珍しく、なかなか見ることができません。香りが強く、ころころとしたぶどうのようなかわいらしい花房で、公園内にも1本しかありません。



薄紅藤



八重黒龍藤

水無月



水無月(和菓子)

四季折々の和菓子文化

6月は旧暦で水無月と言います。津島の下新田地区ではかつて梅や早桃など果樹の栽培が盛んであり、実が熟す頃には、果樹を使った和菓子がつくられます。また、「張州雑誌」には江戸中期の津島の名産として饅頭まんじゅうが書かれています。津島には抹茶文化が残るとともに、季節の和菓子や饅頭をあつかう和菓子屋がたくさんあります。



津島の和菓子

津島名物あかだくつわ

「あかだ」と「くつわ」は古くから津島神社の門前で作られており、昔から参拝客がお土産として買っていきます。日本一硬いお菓子とも言われており、津島神社ゆかりのお菓子です。

あかだは米の粉を練り、油で揚げたシンプルなお菓子です。平安時代に弘法大師が悪疫退散祈願として津島神社に供えたという伝承があり、参拝者が疫病除けのご利益を受けようと買い求めたのが始まりと言われています。

くつわは白米ともち米を熱湯でこねて蒸し、砂糖を加え、油で揚げたお菓子です。茅の輪くぐりの神事に使われる茅の輪をかたどったもので、神馬のくつわに似ていることからこの名前がついたと言われています。



江戸末期のあかだの販売の様子
(尾張名所図会)



あかだ・くつわ

尾張津島天王祭



灯りと水のドラマ 尾張津島天王祭

日本三大川祭りのひとつに数えられる「尾張津島天王祭」は、全国の数ある夏祭りの中でも最も華麗なものと言われています。津島神社の祭礼として600年近くの伝統を誇り、織田信長も見物した記録があります。「尾張津島天王祭の車楽舟行事」は国の重要無形民俗文化財に指定されており、平成28年12月1日に「山・鉦・屋台行事」の一つとしてユネスコの無形文化遺産に登録されました。7月第四土曜日に「宵祭」、翌日曜日に「朝祭」が行われます。

絢爛豪華な巻藁舟 宵祭

5艘の巻藁舟の提灯にロウソクの灯がともされると宵祭が始まります。船の上に半球状に1年を表す365個の提灯、中央高く真柱を立て1年の月数を意味する12個の提灯をかかげた巻藁舟が悠々と進む姿は、絢爛豪華な時代絵巻です。

天王祭の流れ

天王祭は宵祭と朝祭だけでなく、様々な神事が行われます。



ちごちまわし 稚児打廻 (宵祭前夜)
華麗な衣装をまとった稚児が肩車をされて祭舟に行った後、津島神社で祭の無事を祈願します。



みこしとぎよ 神輿渡御 (宵祭当日の朝)
100メートルに及ぶ華麗な行列が続ぎ、津島神社から天王川公園へと神輿が運ばれます。



みこしかんぎよ 神輿還御 (朝祭当日)
朝祭で各舟に乗っていた6人の稚児たちが下舟すると、神輿は津島神社に戻ります。



ちごそうがく 稚児奏楽 (朝祭当日)
神輿還御の後、ご神体の戻った津島神社の拜殿で稚児による演奏が行われます。

燦爛たる車楽舟 朝祭

華麗に装った6艘の車楽舟が登場。先頭の舟から10人の鉦持が水中に飛び込み、お旅所まで泳ぎ、津島神社まで駆け抜け布鉦を神前に奉納します。その奉納した布鉦のしずくを体につけると、病氣や怪我が治ると言われています。



地藏盆



夏の終わりを告げる地藏盆

毎月24日は地藏菩薩の縁日で、8月の盆のあとの縁日を地藏盆といいます。地藏盆の行事は、中部・関西地域、特に京都を中心とした近畿圏に集中しています。子どもを守る仏様である地藏菩薩に感謝し、地域の子どもの成長を祈る行事で、津島市内でもあちこちで地藏盆が開催されます。津島で出会える地藏菩薩を一部ご紹介します。



皆戸町にある六角地藏堂

地藏菩薩の像を6体並べて祀った六地藏が各地にあります。ここは珍しい六角形の灯籠型の地藏堂であり、昔ある家に盗賊が入ったとき、地藏菩薩が六人の僧侶に姿を変えて追い払ったとされ、まちの守り手として信仰を集めています。



今市場町にある十王堂

ここには十王と地藏菩薩をお祀りしています。閻魔王をはじめとする十人の裁判官が十王であり、死後天国に行けるか地獄に堕ちるかは、十王と地藏菩薩との話し合いによって決まるとされていました。



上河原町にある身代わり地藏

眼病平癒または乳の授かる地藏として信仰が厚く、難産の時は身代わりとなって全身に汗をかくことから汗かき地藏とも言われています。





堤を染める彼岸花

天王川公園では秋のお彼岸に合わせて花を咲かせる彼岸花が咲き、色鮮やかな花の色は見る人を魅了します。

四季折々に自然と歴史の情緒

天王川公園は、江戸時代まで当時のまちを南北に流れていた木曾川の支流である天王川がせき止められてできた池を中心に広がっています。天王川公園では四季折々の花や祭を楽しむことができます。春には公園を囲むようにして桜が咲き、ゴールデンウィーク頃には、藤へとバトンタッチをします。初夏からは中之島の橋周辺にはスイレンが咲き、白い可憐な花びらで訪れた人たちを楽しませてくれます。また、7月下旬には尾張津島天王祭の舞台としてたくさんの人たちでにぎわい、秋になると公園一帯は紅葉に包まれます。冬になると雪がふると、天王川公園はいつもとはまた違った風景を見せてくれます。

美しい風姿を伝える津島八景

花と緑と水の公園・天王川公園を彩る四季の移り変わりは美しく、四季折々の風景は、訪れた人々を楽しませてくれます。その美しさは昔から広く親しまれており、江戸時代には津島八景として詩歌が詠まれました。

①居森夜雨
雨くらき居森のかきのふかきよにも
もる雨さしひ木々の下露

③江口夕照
しけりあふ芦のひまく露みえて
江口の夕日かけそうつらふ

⑤長堤暮雪
みるまゝに川面くれて行水の
つゝみは雪になをそ残れる

⑦宮樓晩鐘
いのりても此世はあたの身をしれと
神もいさむる入相のかね



①居森社



③車河戸(天王祭で舟の準備をする場所)

②長橋秋月
長橋やわたりもあへず浪にふし
空にそあふく秋の夜の月

④早尾落雁
行舟の早尾のわたり聲をほに
あけて天とふ雁も落なり

⑥佐屋歸帆
今朝いてし佐屋の船人がへるなり
しほのみちひをなれもゆきくる

⑧狐島晴嵐
雲霧もえやはおりたつ狐嶋
川邊をひろみはらふ嵐に



②中之島にかかる橋



⑤雪の風景



からくりの至芸

尾張津島秋まつりは、10月第一日曜日とその前日の土曜日に開催され、老若男女問わず市内は祭一色に染まります。祭では七切、向島、今市場、神守の4地区から絢爛豪華な山車16台がにぎやかに繰り出し、中でも目を引くのがからくり人形です。津島囃子に合わせて動くその姿は変幻自在で、文字を書くもの、空を飛ぶものなど、迫真の演技が観衆を魅了します。

にぎやかで威勢のよい石採祭

威勢よく鉦や太鼓を打ち鳴らしながら町中を練り歩きます。北部・中部・南部の3車は大正4年頃、唐白町車は昭和31年から始まりました。北部・中部・南部の石採祭車が一度に集結する、津島神社楼門前「石採祭車競演」は迫力満点です。



神楽

屋根には龍・唐獅子、城などの彫刻を飾っており、各町内で神楽太鼓が打ち鳴らされます。



子供獅子

愛らしい獅子頭にはっぴ姿の元気な子供たち。拍子木と鐘を持って「わっしょいチロリン」の掛け声で練り歩きます。



威風堂々! 春爛漫の神守山車

文化年間(1804~1818年)に始まったとされる、桃色の花に囲まれた豪華な山車です。





MAP3

懐かしい風景

かつて津島神社の門前町として、また湊町として繁栄した津島市。
津島の財力が戦国時代には織田家を支え、豊臣家や徳川家ともゆかりある町へとなっていました。
まちには往時を偲ばせる古いまち並みや史跡が多く残り、歴史の薫りが漂っています。

歴史を感じる町並み散策

昔ながらの風景が残る本町筋周辺は、室町時代から姿を変えることなく、無秩序に屈折した細道が残っています。また商家の面影を残す格子戸、蔵、屋根神様などがあり、湊町や商都として発展した証を今に伝えています。まちの発展とともに寺院の進出が始まり、市内には90近くのお寺があります。お寺では、坐禅や写経・写仏などさまざまな体験をすることができます。

昔懐かしい3つの井戸

津島は、木曾川の豊かな水がもたらす伏流水が多く、井戸水に恵まれた土地でした。津島の古地図にはいくつかの町角に井戸が記入されています。これらの井戸は江戸時代に近隣住民の共同井戸として使用されていました。水道の発達に伴い井戸の存在を忘れがちな昨今、古井戸は貴重な存在です。本町筋には上切、坂口町、堤下神社と3か

重要文化財 ^{ほった}堀田家住宅

江戸時代中期に建てられ、津島の繁栄を物語る代表的な町家建築であり、国の重要文化財に指定されています。この住宅は主屋と3棟の土蔵からなっていて、屋根には火事延焼を防ぐ「うだつ」や内玄関の広い土間には今は珍しい「荒神かまど」があります。また、抹茶文化の象徴である茶室を備えています。



MAP5

所の古井戸が残っています。



上切の井戸



堤下神社の井戸



坂口町の井戸



和食を支える醸造文化

世界で和食が注目される中、日本のお酒はSAKEと呼ばれ、海外でも人気を集めています。
お酒だけではなく、醤油や味噌は和食になくてはならない存在であり、津島にはそのような醸造文化が残っています。

津島の酒造り

酒の歴史は古く、神事に酒が用いられてきたことから、酒には不思議な力があると考えられていました。津島神社のご祭神である建速須佐之男命は日本最古の歴史書である古事記に登場しますが、大蛇を退治する際に、酒を飲ませて眠らせたと書かれています。
水郷地帯という利に加え、神社信仰が盛んなことから津島でも古くから酒造りが発展していました。かつては多くの酒屋があり、土蔵が立ち並びました。木曾三川の清流の伏流水、濃尾平野から取れる良質な米、酒造りに適した気候風土により味わい深い酒となります。予約をすれば見学できる酒蔵もあり、酒造りの様子を見ることができます。



商業地としての趣を残す老舗

酒や味噌など和食の基本となる調味料は、ほとんどが麴こうじを使った発酵食品であり、麴は和食文化に欠かせないものとなっています。麴からつくられる甘酒は江戸時代から夏バテ防止のための栄養源として飲まれていました。現在では、飲む点滴とも言われ、美容健康に効果がある飲み物として注目を浴びています。本町筋には、酒や麴などの醸造文化が残っています。

